
破壊神の恵み

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊神の恵み

【Nコード】

N1383Y

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

破壊神シヴァは己のすることが世界にとって役に立つことなのか悩んでいた。その彼に妻であるパールバティーが話すこととは。インド神話を題材にした作品です。

第一章

破壊神の恵み

シヴァはだ。ある日瞑想から醒めてだ。

そのうえでだ。妻であるパールヴァティーに問うのだった。

「私は間違っているのだろうか」

「何がでしょうか」

愛らしい外見の彼女はだ。こゝ漆黑の肌に額にもう一つの目を持ち首に蛇を巻いている一見すると異様だが見事な顔の夫に対して問い返した。

「また急にどうされたのでしょうか」

「私は魔を倒す」

これもまただ。彼の務めである。

「しかしそれと共にだ」

「それと共に？」

「あらゆるものを破壊する」

言うのはこのことだった。

「それは正しいのか」

「破壊はです」

パールヴァティーはだ。夫が悩んでいるのを察してこゝ告げた。

「貴方が司るものですね」

「それはその通りだ」

「では特にです」

「悩む必要はないか」

「そうではないでしょうか」

こゝ夫に話すのだった。

「貴方が司るものですから」

「そうなのだろうか」

「そう思います」

妻はこう言うだけだった。

「それが違うのでしょうか」

「何かを破壊すればだ」

どうなるか。その破壊の神が話す。

「それで多くのものが失われる」

「それはその通りですね」

「そして多くの生命が死ぬ」

シヴァはこのことも言った。

「それは正しいのだろうか」

「死ですか」

「私は破壊により多くのものを壊し多くのものを殺している」

シヴァのその男性的で整った顔にだ。憂いが宿ってきていた。

「それは正しいのだろうか」

「しかしそれはです」

「それが破壊だな」

「貴方の司るものではないですか」

「確かにそうだ」

それはその通りだとだ。シヴァも認めるのだった。

「だが。破壊は悪ではないのか」

「悪ですか。破壊が」

「そうではないだろうか」

「そうは思いませんが」

「思わないのか」

「確かに破壊により多くのものが失われます」

パールヴァティーは事実を話した。そのことは否定できなかった。その大きな黒い目に確かな光を宿らせそのうえでの夫への言葉だった。

「実に多くのものがです」

「そして生命もまた」

「そうです。しかしです」

「しかし？」

「おいで頂きたいところがあるのですが」
「ここでこう言う妻だった。」

第二章

「宜しいでしょうか」

「一体何処だ」

「河です」

「そこだというのだ。」

「河に来て頂けますか」

「河か」

「ガンジス河です」

神々にとつても人間達にとつても他の生命にとつてもだ。聖なる河だ。その清らかな水はあらゆるものを清めると言われている偉大な河だ。

その河にだ。妻は夫を誘うのだった。

「そこに行かれます」

「わかった」

シヴァはパールヴァティーのその言葉に頷いた。これで決まった。二人は一瞬のうちにガンジス河に来た。そのたゆまなく流れる大河のほとりにだ。二人で来たのである。

来てからだ。その流れを見ながらだ。パールヴァティーは話した。

「この河は清らかですね」

「この世界で最も清らかな河だ」

シヴァもだ。その清らかさについて話したのだった。

「この河に来たが」

「それでなのです」

夫に顔を向けて微笑んでいた。

「この河は時として暴れますね」

「氾濫もするな」

「その時多くの者が死にます」

河の流れに飲み込まれてだ。そうなってしまうのだ。

「多くのものも流されてしまいます」

「失われるな。実に多くのものが」

「はい、しかしです」

「しかしなのか」

「その氾濫の後にあるものはです」

ただ氾濫が起こるだけではないというのだ。

「ガンジス河は多くの恵み、豊かな土壌を持って来ます」

「水も」

「そうです。ただ何もかもを流してしまうだけではないのです」

「恵みももたらすか」

「そして流すのはよいものだけではありません」

その他のものもだというのだ。パールヴァティーは話していく。

「悪いものもです」

「悪いものか」

「貴方もです」

そのシヴァへの言葉だ。

「多くの悪しきものを破壊されていますね」

「私は悪を好まぬ」

「そうですね」

「そうだ。私は悪を討つ」

彼は言うのであった。確かな声で。

「それもまた務めだからだ」

「それは河も同じです」

「このガンジスもか」

「ガンジスは何故このうえなく清らかなのか」

そのことも話すパールヴァティーだった。

「それはあらゆる穢れを流すからです」

「穢れをか」

「そうなのです。穢れを清めるものだからです」

「では私は」

「貴方も同じです」

そのだ。ガンジス河もだというのだ。

「全てを破壊し、清められているのです」

「私はそうしているのか」

「清め、そして」

「そしてか」

「そこからまた全てがはじまるのです」

破壊だけではないというのだ。それで終わりではとだ。

「創造がです」

「創造。ブラフマーだな」

創造の神だ。そこからまたはじまるのだ。

第三章

「そしてヴィシユヌの司る調和に入るな」

「創造、調和、そして破壊ですね」

「私が司るのは破壊だが」

「清めるものなのです」

破壊はだ。それだというのだ。

「創造されたものは調和されていくうちに次第に穢れも備えてしま
いますね」

「どうしてもな。そうなるな」

「しかしそれは清められるのですから」

「私によりか」

「そうです。破壊により消えたものの、失われた命は創造によって蘇
り」

輪であつた。全ては。

「そうなるのですから」

「では私はそのものもその魂もか」

「清められているんです。その貴方が何故」

「悪なのか」

「そうではないです」

これが夫である破壊神への言葉だった。そして妻のその言葉を聞
いてだ。

シヴァは考える顔からだ。こう述べるのだった。

「では私は間違つてはいないのだな」

「全ては輪の中にあるのですから」

「その輪の一つ、清めを司っている」

「それが貴方なのですから」

「そうなのだな」

妻の再度の言葉を聞いてだった。

彼はその顔を晴れやかなものにさせてだ。こう話した。

「では私はこのまま司ろう」

「貴方の為されるべきことをです」

「そうだ、それを司ろう」

こう話すのだった。

「そして世界を清めよう」

「そうされて下さい。そしてです」

「そしてか」

「その清めがです」

彼の司る破壊、即ち清めが何かも話す妻だった。

「貴方のこの世界への恵みなのです」

「破壊、それが清めか」

「そうなります」

こう話してだった。彼等はだ。

その悠久なるこのうえなく清らかなガンジスを見るのだった。それはあらゆるものを含み流れていた。そうしてそのあらゆるものを清めていたのだった。

破壊神の恵み 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1383y/>

破壊神の恵み

2011年11月2日00時23分発行